

## 「狂気から正気に回復する」

2015年07月03日

ルカによる福音書8章34節～39節。この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。悪霊どもを追い出してもらった人が、お供したいとしきりに願ったが、イエスはこうってお帰しになった。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。

主イエスは異郷のゲラサに来られた。そこに、死と壊滅の恐怖を与えていたローマの重武装軍団レギオンの悪霊に取りつかれ、衣服を身に着けず、自分自身を傷つけ、他人を恐れさせ、墓場を住まいとする男がいた。彼は繋がれた鎖や足枷を引きちぎる凶暴な人であった。主イエスは男に取りついていて悪霊を豚の群れに乗り移らせた。すると、豚の群れは暴走し、湖になだれをうって突入し、皆溺れ死んだ。止まることを知らず暴走し、自ら死へと赴くレギオン・軍団の狂気を表しているのではないか。

目撃した豚飼いたちは逃げ出し、町や村に行つてこのことを知らせた。人々が来て見ると、狂気の男が正気になって、服を着、主イエスの足もとに座っていた。悪霊から解放された訳である。ゲラサ地方の人々は恐れ、主イエスに出て行ってもらいたいと、願った。凶暴な男が正気に戻ったことは、人々にとって安心できる喜ばしいことであった。しかし、豚の群れの損害は甚大である。ユダヤ人は豚を不浄な動物と見なし、飼うことはなかった。豚を飼うゲラサ人にとっては、肉は食料となり、皮も毛も利用され、捨てるところのない経済効率の高い家畜である。それが失われた。一人の人間の救いより、経済的損失が問題であった。営利のみを求める者たちのエゴイズムである。

経済的豊かさを追求する蔭で弱い人々が無視され、命を奪われた事例は足尾銅山の鉱毒公害、水俣水銀公害等々、枚挙にいとまがない。原子カムの権力者たちは福島原発事故被害者を顧みず、事故処理もできない中、更なる原子力行政を押し進めている。人間を無視するゲラサの住民の対応と重なって見える。主イエスは一人の男の救いのために、豚の損失による犠牲を払わせた。人が苦しみから抜け出すためには、多くの犠牲が必要であることを示されたのではないか。人は皆、他の人を踏み台にし、多大な犠牲を負わせて生きているのである。

死へと暴走する軍団の狂気と営利のみを求める者たちのエゴイズムの狭間で、主イエスによって、男は神と結びつけられ正気へと回復する救いを得た。聖書は、主イエスの十字架の犠牲によって、この救いがもたらされたことが福音であると告げている。

正気に戻された人は喜び、主イエスに従って行きたいと願った。主イエスは、家に帰り、神がしてくださったことを話し聞かせなさいと言われた。彼は、主イエスの言葉に従い、町中でことごとく言い広めた。彼が異教伝道の最初の担い手である。